



工高タイムス

北海道旭川工業
高等学校新聞局
〒078-8804
北海道旭川市緑が丘
東4条1丁目1-1
発行人(局長)
稲留 駿斗
(電気科3年)

生徒会役員選挙

会長候補に浪岡君と今西君 4役員は再選挙に

生徒会役員選挙の立会演説会と投票が今日の1時間目に行なわれる。会長には浪岡凌玖君(土2)と今西孝太君(電2)が立候補した。8役員は無投票で当選した。残りの4役員については後日、再選挙が行なわれる。

会長候補の浪岡君と今西君に旭工をどのようにしたいかを聞いた。

浪岡君は「生徒会がクラスルームのアンケートだけでは拾えない要望も多いので、細かい意見にも目を向けてほしい。工高祭での花火はコストがかかりすぎる」と話した。

今西君は「旭工に入ってから思ったと思う学校にしたい。」

生徒会役員

会長	(選挙)
副会長	島田 大輝(建2)
書記長	入江 大峨(情2)
書記次長	只野 恋(土1)
会計長	夢原 海斗(土2)
会計次長	牛田 隆希(土2)
生徒会誌編集委員長	(再選挙)
体育委員長	(再選挙)
行事委員長	(再選挙)
議会議長	長部 音哉(土2)
議会副議長	(再選挙)
監査委員長	岸本 強汰(土1)
監査副委員長	甲賀 悠斗(土1)

美術部

2人が入選で全道へ

「作品が評価されうれしい」



酒井柊也君(建3)の作品

美術部は8月19〜21日に旭川市民文化会館で行なわれた高文連上川支部美術展・研究大会に参加した。酒井柊也君(建3)と中嶋未留人君(情2)が入選し、作品が全道大会に出品される。佳作には谷藍衣さん(化3)、大田泰士君(電3)、鈴木結人君(情2)、森脇千桜さん(建1)が選ばれた。6人は10月8〜9日に釧路市で行なわれる全道大会に参加する。



中嶋未留人君(情2)の作品

酒井君は「自分の作品が評価され、入選してうれしい」と話した。

中嶋君は「入選できてうれしい。作品は人間と魚が共存している世界で、魚が死んだあと、人間はどのように処理するのかを想像しながら描いた。多くの色を使い、カラフルな作品にしたことで、見る人に与えるインパクトが評価されたのではないかと。これからはさらに色の使い方を学び、次の作品をどうすればレベルアップできるのか考えていきたい」と話した。

陸上部

3種目で全道出場 自己ベストを伸ばす

陸上部は8月22〜23日に花咲スポーツ公園陸上競技場で

行なわれた第42回北海道高等学校新人陸上競技大会旭川支部予選会に出場した。1500mで村上蒼空君(電2)が優勝、やり投げで瀧田来愛君(機2)が優勝、4×100mリレーで4位に入賞した。9月16〜18日に函館市で行なわれる全道大会に出場する。リレーに出場した部長の田中陽斗君(建2)は「今年は旭工に速い選手が多いので全道大会出場は当然。一時はメンバーの調整が甘く、走り切れないと思った。メンバー皆が頑張る、バトンパスにも大きなミスはなかった。チームでのベストタイムと4位の結果を残せたので良かった。全道大会に向けてストレッチャや練習で調整をしていく。メンバーのバトンパスのタイムングをつかんで、各自の実力も底上げしていく。43秒台を目指してスムーズなバトンパスや体の調整をして決勝に出場する」と意気込んだ。

1500mに出場した村上君は「新人大会では絶対に自己ベストを出して優勝すると決めていた。その二つを達成することができて良かった。ラスト800mから先頭に出て積極的にレースを進め、ラスト一周で一気に上げて1位になれたことが良かった。全道大会に向けてラストスパートの切れ味とレースペースに対応できるようにしていく。ラスト100mが苦手なので、そこを重点的に練習する。4分03〜06秒を出し入賞する」と意気込んだ。

★旭工 ライフ

観客を楽しませる

演劇部 脚本・演出
西中美咲さん(化2)



好きな食べ物はうどん

演劇部は10月1〜3日に鷹栖町のたかすメロディホールで行なわれる高文連上川支部演劇発表大会に出場する。上演作品の脚本を書いた。タイトルは「男子高校生の憂鬱」で、主人公と親友2人が主軸となっており、主人公が好きな人に振られ、それを親友2人がいじり

ながら主人公をもてる男性にしている、失恋ギャグストーリーだ。夏休み前から脚本を考え、2、3回書き直して1か月ほどで完成させた。部員は6人。今回はギャグ作品なので、テンポが大事になる。観客を飽きさせないようなテンポを意識して練習している。また登場するキャラクターが全体的にギャグ寄りである。シーンが高いので、皆で元気よく演じるようにしている。

本番では観客を一回は笑わせたい。後輩たちは演技力が高いので、今後の伸びしろに期待したい。

旭工オリピックを待機生徒も楽しめるようにしたい。普段の学校生活で不便と感じるところを改善したい。例えばトイレの臭い、自習室の設置

など。皆の意見を集め、取り入れて実行したい」と話した。立候補者が1人だった8役員については、昨年5月に選挙細則が改正され、無投票で

信任となる。立候補者がいなかった生徒会誌編集委員長、体育委員長、行事委員長、議会副議長については後日、再選挙となる。



工具箱

電気科のインターンシップが9月10〜11日にあり、私は北海道電気保安協会旭川支部に行った▼1日目の午前は会社の説明や入社するときの最低限必要な資格、発電所から一般住宅に電気を送るまでの道のり、感電や停電のなり方やその後の問題、実際にあった事故、高圧受電設備についての座学と社内見学などをしての午後はVR体験で感電事故や階段や電柱からの落下事故、車の衝突事故を想定した映像と振動を体験した。2日目の午前は愛別ダムの見学で発電設備や受電設備を見たり、説明を聞いた。午後からは高圧気中負荷開閉器や真空遮断器、高圧交流負荷開閉器の実習をした▼私は将来、電気関係に就職しようと考えているので、感電に関する説明は将来に生かせると思った。家庭での漏電や火災などの説明を受け、ケーブルの断線や重い物の下敷きにならないようにすること、洗濯機などの接地のし忘れによる漏電やたこ足配線による発火などの事故は日常生活で起こりやすいため気を付けて生活してほしい。また、VR体験で感電を身を持って知ることができた。保守点検に関する職業に就くこともあるので、水力発電所の見学や説明で教わったことを通して点検の内容など知ることができたので、インターンシップでの経験を将来に生かせるようにし、資格の取得や学業に励み就職の選択肢を増やしたい。(電2小西)

新聞支部

旭川市長と総合庁舎を取材

全道リハと記事の書き方を学ぶ

高文連上川支部新聞研究大会が8月17日に旭川市民文化会館で行なわれた。4校の生徒22人と顧問8人が参加した。午前は開会式の後、旭川市役所へ取材に行った。総合庁舎

の展望ラウンジ、アスリートのスクエア、議場を担当職員の方や旭川市長の今津寛介さん(49)から説明を受けた。その後、特別に市長室で今津市長に取材した。



アスリートスクエアの北口榛花選手の手形を力を入れて説明する今津市長

今津市長

理想を持って行動
食べマルシェに二工夫

今津寛介市長は「座右の銘にしている言葉が二つある。一つ目は『龍となれ、雲自ずと来たる』という言葉。高い志で理想を持って行動していけば同士は自然と集まってくるという意味だ。二つ目は

『中庸』という言葉。極端に偏らず、また過不足なく調和がとれていることを意味する。この二つの言葉をいつも意識している。また『日本一の市長・日本一の街を作る・日本一の職員と・日本一の市民と

分科会の報告者の武田修大君(旭川永嶺高校)の発表を聞き、質問や改善点を出しあった。その後、第1分科会Aの討論をして全道大会のリハールと確認を行なった。

記事を発表して、お互いに講評しあった。副局長の小西君は「今津市長に取材することで、新しい総合庁舎のことやイベント情報、仕事のモットーなど、これからの自分に生かせることを知ることができた。午後の分科会①では、全道大会の第1分科会Aの運営に向けて討論の流れや自校の改善点が分かった。本番で他校の新聞局員・部員と協力し、より良い討論をしたい」と話した。

全国高校新聞コンテスト

企画賞を受賞

全国高等学校新聞教育研究会主催の第3回全国高校新聞コンテストの結果が8月末に届き、新聞局は企画賞を受賞した。7月末に行なわれた第50回全国高等学校総合文化祭あきた大会新聞部門では第30回全国高等学校新聞年間紙面審査賞で優秀賞(ベスト12)を受賞しており、新聞局は全

国規模のコンクールでダブル受賞となった。コンテストは1号のみの応募となっており、新聞局では旭川市長選挙のアンケートと写真部、陸上部、ソフトテニス部などの載った工高タイムス第524号を応募した。局長の稲留駿斗君(電3)は「旭工生の活躍のおかげで優秀賞と企画賞を受賞することができた。これからも新聞局に応援と取材に協力を」と感謝の言葉を話した。

ともに」という考えを大事にして仕事をしている。職員を大事にすることで、一団となって仕事ができると思うので、常に心掛けて仕事をしている。自分の選挙を振り返ってみると、1回目の演説では自分の考えをもとに、自分がこうしたいという公約を掲げていた。そのため落ちたのだと思う。2回目では市民の方々の意見や要望を受けて、市民との約束を果たすための公約を掲げ

たので当選することができた。約束したからにはそれを果たしたいので、旭川を活気のあるより良い街にするために日々努力している」と語った。最後に今津市長にこれから市内のイベントで注目しているものは何かを聞いた。「もうすぐ、9月19・21日に『食べマルシェ』のイベントが平和通買物公園で行われる。このイベントの開催に先立ち、職員と何度も意見交換

紙芝居

十勝岳爆発の思い出②

「水が来る、山に登れ」

巨石がゴトンゴトンと

(第549号からの続き)

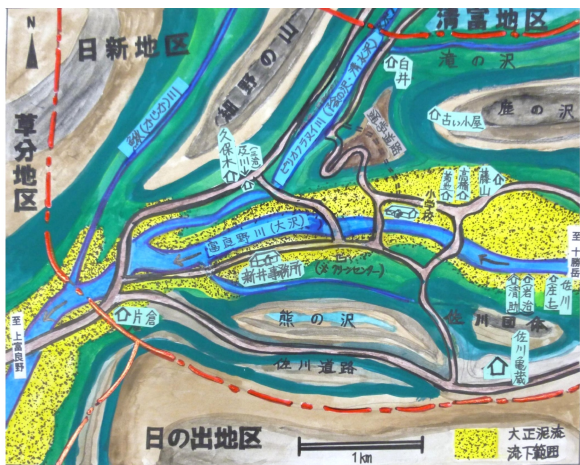
私たちは9時半頃、清水沢の及川さんの付近に着き、それから上流に向って釣りはじめ、12時頃、元の白井さんの所に姉の嫁ぎ先の家があったので、そこで昼飯を食べ、午後からまた釣りはじめましたが、その頃は何とも気味の悪い山鳴りでした。

木が縦に跳びはねる

地鳴りもするようになってきたので、恐ろしくなつて家に帰りは

じめました。陰の沢の通学道路を高台に登り、学校の上の中段の檜(なら)の木あたりに来たとき、下から片倉さんが走って上がって来ました。「水が流れて来るから早く逃げろ」と言う間もなく、一杯にガスとも水ともつかぬものが一瞬のうちに流れ過ぎたのです。山の木も縦になって跳びはねて流れていました。片倉さんは「この山を越すから細野の山に登れ」と叫び、私も水だから飛び越えてく

清水の沢に下つてから細野の山の中腹を片倉さんは南に、私たちは北の方に向って「水だ、水だ」



日進地区の泥流被害 絵は井上文雄さん

すべてが水に流される

家のあった近くをもしや家族の者が遣い上つていないかなと思つて探しましたが、1人も助かつていなかったのです。家族も家も馬も道も食べ物も生活もすべてがなくなりしました。

それから鹿の沢の高台に上つたら、高橋さんたちが素足で7、8人逃げてくるのに出会いました。

藤山さんの沢をまた大沢に下つて見ましたが、もう暗くなつて何

も見えませんでした。坂の中段で藤山さんが入植当時の所に作業小屋として使っていた古い小屋があったのでそこに泊ることにしました。

その頃はまだ沢の泥水がものすごい音をたて、大きな石もゴトンゴトンと流れていました。私は考える力も、言葉も失っていました。夜に入つて細い月が出ていましたが、雨上りの雲が晴れたり、かかったり、水の流れる音に混じつて助けを呼ぶ声が聞えるような、淋しいとも何とも言いようのない思いがして眠れませんでした。

開拓30年の努力が無に

夜が明けかかったので大沢に下つて見ました。久保木さんの家が少

し高い所だったので残ってはいませんが、人はいませんでした。後で分つたのですが、隣の家に行つていて流され、死んでしまったそうです。菊地さんの家の一部が山手に押し流されていました。ガスも晴れて沢も見えるようになりましたが、その様子はとてもこの世のものとは思われない、さびしい、せいさんなものでした。開拓30年の努力がすべて無くなったのです。このとき、下流の方でニワトリの声が聞えたときは何となく救われたような気がしました。(つづく)

紙芝居のもととなった被災者の手記は、上富良野町郷土をさぐる会が1981年に発行した機関紙「郷土をさぐる」第1号に佐川亀蔵さんが寄稿したものである。